

私の保育

—— たりない!! 何度かぞえても一人たりない! 帰るし
たくをする前には全員いたはずなのに。——名前を調べてみる
とSちゃんがいません。「Sちゃんは?」と子どもたちに聞くと、「知らない」と答えました。

さつきまで確かにいたはずなのに、どこへ行ったのかしらと思つて、ゆうぎ室、校庭、お手洗い……と探してみましたが、どこにも見えません。次第に不安になってきて、あつちのへや、こつちのへやと走りまわったのですが、やっぱりいません。

まっさおになって主任の先生のところにかけてこんで「Sちゃん、いないんです!」と話すと、「もしかして、家へ帰つたのかもしれないから、すぐに電話してごらんさい」と言われて職員室へ走って行きました。ダイヤルが回るのもどかくしく思いながら電話をかけると、「S子はまだ帰っていませんけど……」との返事。一瞬、交通事故などよくない事が頭に浮かんできま

島田 ななみ



したが、どうすることもできず、へやにもどつて他の子どもたちに「帰るのはね、先生にさようならをしてからなのよ……」と話しました。すると、どこからかS子がトコトコへやに入つて来ました。

「あら!! Sちゃん!」

私はかけ寄つて、「Sちゃんが急にいなくなつちゃったんで、先生心配してたのよ」「Sちゃんどうしたの?」と思わず聞きました。

「あたしね、おうちかえつたの。そうしたらママがね、ようちえんまでつれてきてくれたの」と本人はケロツとしています。

入園して間もない四歳児には、黙つて帰る事がそれほどたいへんな事とはわかっていないと知りながらも、一人で帰つては危ないこと、帰るときは先生にさようならをしてから、お母さんと一緒に帰ることなどを、夢中で話したのですが、Sちゃん

は、ウンウンとうなずきながら、隣の子どもに話しかけたりしているのです。

一度に、安心感と自分の至らなさに対するもどかしさがまじり合って、全身の力が抜けて行くように思われました。

ほんとうに子どもたちの動きがはやく、それは想像以上のものでした。

今、ここにいるからといって安心してはいられません。次の瞬間にはへやに行つて、やつとの手で手に入れたカタツムリを、ジャブジャブせつけんをつけて洗濯してしまつたり——。ここと思えばまたあちら……。子リスのように動きまわる四歳児が四十人もいるのですから……。新米とはいえ、親リスもそれにつれてとびはね、走りまわり、ときにはつまずいてころんでしまつたり、失敗につぐ失敗で、先生は大いそがしです。

☆ 「ぼくのめぐみまだ？」

私の園では、新入園児を、先生と五歳児が同じ立場に立って迎えようと、三年前からたてわり保育、というのをしています。

たてわり保育では、四歳児が入園する以前に、五歳児との組み合せを決めておき、一年間、運動会、遠足など活動に応じてたてわりの組合せで行なうようになっていきます。

年長組は、四歳児が入園する前から「幼稚園に来たらままご

としようね」「ブランコしようね」などと書いた手紙を四歳児に渡し、新学期が始まると、年長児だけ八時十五分に登園して自分たちの活動をします。一時間遅く年少児が登園してきた時に、五歳児は迎えに行き、靴、帽子、かばんの置き場所を教えあげたり、服のボタンはめを手伝つたりして一緒に遊ぶのです。

私の園には主任を含めて教師が三人いるので、この四歳児と五歳児の組合せを十三組くらいずつ三グループに分け、四月初めの時期には、一グループずつ担当するようになっていきます。

四月では、五歳といつてもまだ四歳のからをつけているようなところもあるので、そうした子どもたちがどのくらい四歳児の面倒をみられるのか、教師としては、どの程度五歳児に面倒みるように促すのか、途中でいやになって放り出してしまうのではないか…… などと心配していたのですが、いざ始まってみると、五歳児の方には、自分たちが以前にやつてもらつたように年少児の世話をしようとする姿勢がみられ、「ぼくのめぐみ(年少組) いないよ」「あたしのめぐみまだ来ない」と毎日年少児を迎えるのを楽しみにしているようでした。ところが、あまり一生懸命に世話をしすぎて、年少児がかこうとしていた絵まで年長児が代つてかいてあげたりして、私たちをびっくりさせることもありましたが、教師の話をきいて「Aちゃん、わ

「あった？」と隣にすわっている年少児に尋ねている姿をみると、何かあたたかいものが感じられました。

四歳児の方は、五歳児に教えてもらったとおりにうしろからくっついて行く子もいれば、おもちゃのとりっこなど年長児と対等にやり合い、いつも年長児に「はな組(年長組)にいばる気か？」といわれるのでそれを逆手にとって「はな組なのにめぐみにいばる気か？」と年少とはいえ、負けず劣らず言い合う子どももいます。

こうしたかかわり合いの中で、二人の関係がうまく進んでいく場合もありますが、年少児が年長児をこわがり、みんなと一緒に遊ぶのを食べようとすると「○○ちゃんと一緒にいやだ」といって泣き出したり、年長児のやっている電車ごっこに入ってもらおうとすると、「ぼく、いやだなあー」「どうして?」「だってー○○ちゃんこわいんだもん」などと言い出す子どももいます。

そうした一つ一つの場面で、私は一体何といっておいたらよいのか迷ってしまいます。

☆ 「ぼくにつかまっついいよ」

一カ月くらいたって子どもたちも先生もやっと慣れ、四歳児も朝幼稚園に来て、少しずつ自分から遊びだせるようになって

てきました。

そんなある日、毎日喜んで登園していたK子が、朝、靴箱のところで母親にしがみついて泣いていました。「今日はなんだか朝からぐずって、幼稚園に行きたくないって言うんです」とお母さん。「Kちゃん、先生と一緒におへや行こう」と誘ってみても、体をよじらせて大声をあげて泣いています。お母さんがKちゃんの手をふり払うように「よろしくお願ひします」と言って帰っていったあと、私はKちゃんのをばにすわって、

「どうして幼稚園来たくないの?」と聞くと「だってつまんないんだもん」とポツリと一言返ってきました。そのとたん、毎日K子が一人で遊んでいることが多く、フツとつまんなような表情で友だちを見ていたりすることを思い出しました。先生は何でも言えるK子ですが、友だちの中では充分に自分を出しきれず、時々自分のからの中に閉じこもってしまうようなところが、そうした発散しきれない部分が積み重なって、K子に「幼稚園つまらない」と言わせてしまったのだと思われました。

こうしたK子のように気づいていながら、何もせずにいた自分がとても後悔され、この場合のように、子どもの中からはつきり表われる場合だけでなく、見えない部分でこれと同じことをしているのではないかと心配になったりします。

また、生活に慣れてくるに従って、少しずつ子どもたちも本領を発揮してくるのですが、それに伴って「Bちゃん、そんな高いところあぶないわよ」……「先生がいないとき、鉄棒やらないお約束でしょう」……「うんていは、はな組になってからやるのよ」「ほら、そんなにお水をたくさん出したらあふれちゃうでしょ」……など、一日中小言をいい歩いてしまい、保育の終わったあと、「今日は一日何をしていたのかしら」とひどく後味の悪い思いをすることも多くなりました。

そして、そういう時に注意される子どもはいつも決まっています。

Yちゃんもその一人。わけもないのに突然近くにいる子どもをぶって泣かしたり、水をひっかけたり……「いけない」と言われるとますますやったり……。いろいろな言い方で話して聞かせても、その時は「わかった」というのですが、すぐに同じことをやるので、子ども同志の中でも「Yちゃんはこわい」と思っている子もいて、私もどのようにしたらよいのか困ってしまいました。

ちょうどそのころ、歩いて三十分ぐらいのところにある有栖川公園に遠足に行きました。公園には、幼稚園にはみられないたくさんのお土と、こんもり茂った木々があります。子どもたちは公園につくと、勢いづいたように元気な足どりになり、小川

のそばにある小さな赤土のかげのところに来ると、みんな上へかけのぼっては、おしりをつけてすべり下りて来ます。どの子も「どろのおすべりだ!!」と、手も足もどろだらけになって歓声をあげていました。

Yちゃんも必死になって何度も登ったりおりたりしていましたが、そのうち、登っている途中ですべり落ちそうになっている子どもに「Aちゃん、ぼくの手につかまっていいよ」「よしよ、よいしょ」と上まで引っぱり上げています。

Yちゃんに、こんなやさしいところがあったのだなあと感心していると、すべり降りて来たYちゃんが、「せんせい、ぼくが上までつれてあげようよ。手につかまるんだよ」といって私も引き上げてくれました。「わあ、Yちゃんのおかげで一回もすべり落ちないのぼれちゃったわ。Yちゃん登るのじょうずね」というと、ちょっととれくさそうな顔をしてにっこり笑い、またすべりおりて行ってしまいました。

私は思いがけないところでYちゃんを再発見できてとてもうれしくなったと同時に、その子どもの持つすばらしい力が発揮できるような活動を私が考えてあげなくては、「ダメ、ダメ」と注意ばかりしている先生からは抜け出られないように思われました。

☆ 「むりにやったら泣いちゃうよ」

五月になってから、突然声が出なくなりました。毎日、子どもに負けじと大声を出しているのですから無理ありません。

「Aちゃん、静かにしないとみんながお話きこえなくなるわよ」と言いながら、気がついてみたら、自分が一番大声を出していることもしばしばあります。なにしろ私のクラスの子どもたちは「もう片づけましょう」と言うと、「いやだよ」とどこかへ走って行ってしまおうし、帰るときぐらい落ちついてフラフラとんで行ってしまおうし、帰るときぐらい落ちついて絵本でも読もうと思うと、あちこちで騒ぎ出し、一人静かにしたと思うとまた別の子がとび上がった……まるでたくさんのすいかを水の中に沈めるようなもので、一つ沈めても他のすいかポカポカ浮き上がってくるような感じです。

そこへいくと、子ども同志というのは不思議な力を持っているようです。

M子ちゃんは、四月からなかなかクラスの中に入らず、毎日靴箱のところ、メソメソ泣いていました。一度男の子にぶたれてからは特にひどく「Mちゃんいや、おとこの子こわい」と言うので「もうぶつたりしないからだいじょうぶよ」といくら話しても入って来ません。こちら、少しかまわずにしておい

たり、指人形を使って話しかけたり、みんながかいた絵をその子のいる所にまで持って行って「これTちゃんがかいたの。すいかなんですって。Mちゃんすいか好き？」などとあの手この手で話しかけてみるのですが、なかなか反応はかえって来ません。

お弁当になってもへやに入ってこない時には多少強引にでもへやに連れて来るのですが、それをみていた子どもが、

「むりにやってもだめだよ。その子泣いちゃうよ」と言うのです。M子がなかなかへやに来ない時、「誰かMちゃんつれて来て」と頼むと「ぼく行って来てあげる」といって走り出たN夫は、どのように言ったのか、間もなくM子をつれて「ぼくつれて来たよ」と言ってやってきました。

私が何と声をかけてもビクともしなかったM子がどうして素直について来たのか、N夫がどんなふうに行ったのか、こっそりその秘法を教わりたいような気がしました。

こうして、何かをさせようやっつきになればなるほど、子どもの中に強い反発力がふくれ上がるのを見て、自分がいかに子どもをことばだけで動かそうとしているかが痛感されました。

毎日たくさんの事を子どもたちに教えてもらいながら、二学期こそ、もっともつと子どもと一緒に遊んで、子どもを見つめて行きたいと思っています。

(港区立東町幼稚園)